

★VOL 14 令和3年7月3日発行

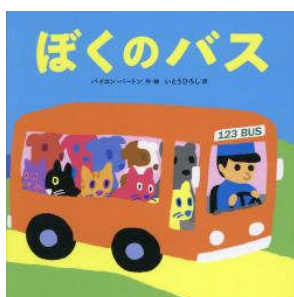


絵本の楽しさをあそび分け

■「ぼくのバス」

バイロン・バートン／作

くっきり、はっきりの絵、そしてセンス抜群のデザインが魅力。●バートン84歳の出版。訳は、絵本作家のい

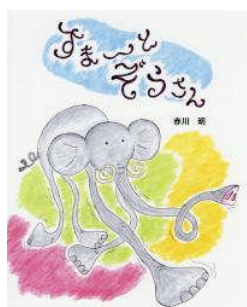


とうひろしさん。バスの運転手・ジョーが動物を乗せ、船、電車、飛行機のところで順に降ろし、家路につくというシンプルなお話ですが、仕事・数・小さな旅行の物語にもなっている優れたもの。短く簡潔で歯切れの良い文も光ります。●2歳くらいから。

■「すまーと ぞうさん」

赤川明／作

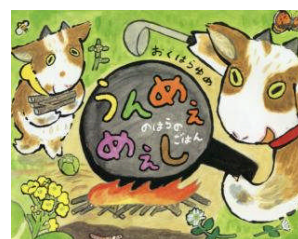
足が長くてほっそりした〈すまーとぞうさん〉は、よく足がからまります。ぞうさんはこんがらがった足を自分で考えてほどくのが大好き！でも、みいちゃんやヘビ、サル、ダチョウたちは、こんがらがった足をほどこいてあげとうとしますがとんでもないことに…。●子どもたちは絵を見るだけで、そのとんでもなさに笑い転げることでしょ。絵本は楽しい！を感じる作品。●3歳半くらいから。



■「うんめえ めえし」

おくはらゆめ／作

文と絵の両方がのんびり、ふわふわとした温かさに包まれ、味のある



物語。●双子のやぎ、あんちゃんともなちゃんはいつもおいしい食べ物を探している食いしん坊。春の暖かい風に誘われ、包丁やフライパン、調味料を持ち、「うんめえ めえしがまっている！」と言いながら野原にお出かけ。●野原には色々な新しい葉っぱや花の蜜など食材がいっぱい。2匹は茹でたり焼いたりの下ごしらえをし、夕焼けを見ながらのおにぎりご飯。●何のために食材を集め、下ごしらえをしたのかは物語後半のお楽しみ。●おいしい料理を作って食べる幸せに満ちています。●おまけの〈のはらごはん〉と名前がついたレシピがおいしそう。●4歳くらいから。

■「おやつトランポリン」

大塚健太／文
小池壮太／絵

イチゴやチョコ、サクランボがトランポリンでジャンプして何かとドッキングしてステキなおやつに変身…動きと変化が楽しい作品。●どの



おやつもおいしそうで、最後のページにビックリのおまけ付き。2歳半くらいから。

■「フートンのおふとん」

北村裕花／作

ふとんにもぐり込んでいるときの気持ち良さが伝わってきます。●こぶたのフートンはふ



とんのふわふわほわほわする感触が大好き、幸せです。牛とナマケモノに誘われ、遊びに出かけるときも体にふとんを巻きつけるほど。3匹で木の実を取って食べ、フートンのふとんで3匹揃ってお昼寝をしていると風でふとんが飛んでいって…。●ふとん探して出会う動物みんなが気持ち良くなる終わり方がステキ。●3歳くらいから。

■「好きなこと にがてなこと」

新井洋行／作

子どもとおとな、国や性別、肌の色が違って、人は〈好きなことと苦手なことがあって当たり前〉を描いています。●そして人と人がつながっていくことで互

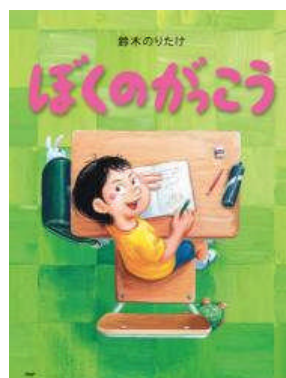
いを助け合う…同じクラスの子も同士から家族、ご近所、そして世界に広がるように描いているので、子どもたちは身近で具体的なことから外の世界に目を向け、イメージしやすいことでしょう。絵も具体的なので伝える力が十分。●5歳くらいから小学生に。



■「ぼくのがっこう」

鈴木のりたけ／作

シリーズ4作目。〈いつも〉の当たり前が違っていたらおもしろいんじゃないかな？という子どもの空想力をたくましく広げ



てくれます。●玄関が滝になっていたら？げた箱に鳥が住んでいたら？から始まり、学校が船になり、空飛ぶイスがあったり…。ワクワクしながら存分に絵で遊べます。「ぼくのおふろ」「ぼくのおふとん」「ぼくのトイレ」もどうぞ。●4歳くらいから。



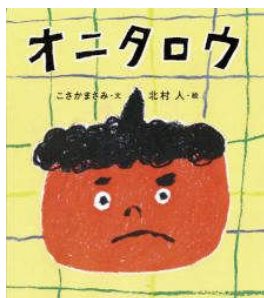
本との出会いを

ボーイズ&ガールズに

■「オニタロウ」

こさかまさみ／作 北村人／絵

昔話のオニを現代に置き、心やさしいオニタロウが小さな子どもたちと一緒に知恵を出して困難を解決するお話。●オニが谷にはたくさんのオニが住んでいます。



10歳になると谷を出て自分で暮らす山を見つける決まりです。オニタロウは、カキ

の木山にやってきて、動物たちとなかよく暮らしています。●ある日、オニタロウのお父さんが訪ねてきます。来年の2月にもう一度くるから、その時にはコブン(子分)に会わせると約束させられます、オニのお父さんはとてもこわいのです。オニタロウには動物の友だちはいても子分なんていません。●オニタロウは友だちのカラス・カースケと一緒に子分になってくれる動物を探します…。ある日、たけのこ保育園の子どもたちが〈おにごっこ〉で遊んでいるのを見ていいことを思いつきます。子どもた

ちに子分になってもらうのです。●元気いっぱいの子もたちとオニタロウのやりとりは思いがけない展開になりますが、気持ち良く終わります。子を思う父親の愛情も感じ取れます。●小学校低中学年に。

■「あしたもオカピ」

斉藤倫／作 acomi／絵

シカやシマウマ、ロバの一部分に少しだけ似ているけれど違う不思議な動物・オカピが主人公。●動物園のオカピと飼育員のおじさんが一緒に夜



空を見ていると4つに割れた四つ葉のような月が浮かんでいます。飼育員のおじさんが言うには、〈四つ葉月〉の夜には動物たちの願いが何でもかなうとのこと。オカピは、動物園の小屋や柵のカギを開けてもらえるようお願いしました。オカピは他の動物たちと会い、話してみたかったです。

●最初はゾウ。ゾウは、お客さんたちが鼻の長さや体の大きさなど、ゾウの見た目だけにしか関心がないことに悩んでいました。サルやカンガルー、コアラ、ペンギンたちの願いごとを聞いたり、話をするうちに、タイトルの〈あしたもオカピ〉という気持ちにたどり着きます。●子どもたちは、オカピが会える動物たちの願いごとやオカピの気持ちの変化に自分を重ねあわせて感じるかも…。●小学校低中学年に。

■「おしゃべり森のものがたり」

小手毬るい／文 長田恵子／絵

作者の小手毬るいさんは、ニューヨーク郊外の森に囲まれた家で、野生の動植物とふれあいながら暮らしていて、この物語はそんな場所が舞台です。



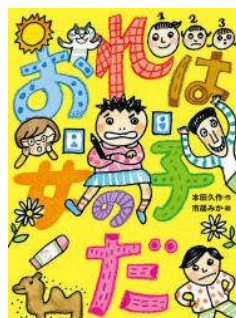
●小学校3年生の舞は、夏休みを過ごすた

めに、お父さんと一緒に、アメリカでおとうさんの妹（みちるさん）一家が暮らしている山と森に囲まれている村へやってきました。毎年、楽しみにしている家族旅行ですが、今回はお母さんがいないので気持ちは晴れません。お母さんは、来月から仕事でイタリアに転勤するのです。●女性が家庭の主婦であり、母親であり、同時に仕事でキャリアを積み上げていくことを舞という子どもを通して理解していく物語であり、かつ自然の中でたくましく生きている動物たちからエネルギーをもらう物語です。●作中、舞やみちるさんの家族全員がリレーで作る〈おしゃべり森のものがたり〉を通して、物語の中では会いたい人にいつでも会える！という物語の強さを伝える作者の思いも大切なところ。●作者が暮らしている環境やアメリカという社会を背景に生まれた作品。●小学校中高学年に。

■「おれは女の子だ」

本田久作／作 市居みか／絵

本の帯にある〈アイツのキモチ…自分のキモチ…ひとのキモチについて考える、おれの話〉が全編を通して描かれています。●ふしぎな



タイトルです。物語の始まりは、小学校3年生のすばるが空想で描いたピンク色の空の絵を同級生の男子から女の子みたいだからかわれたこと。すばるは腹が立って思わず言います。「そうだよ、おれは女の子だよ。もんくあんのか」。●すばるは絵が得意できれいなものが好き、そしてピンクが好き。すばるは〈女の子宣言〉をしてからは、女の子たちの応援を受け、お母さんやお姉ちゃんたちのアドバイスも受けながら、お姉ちゃんのピンクの服を着せられたり、スカートをはかせられたり…すばるは、〈女の子だったら？〉を考え始めますが、すばるが考える〈きれい〉が女の子たちの〈きれい〉の違いが物語の大事なポイント。●最後にすばるが描いた絵は、〈きれい〉

を自分自身で考えた〈サイコーケツサク!〉。●〈あとがき〉の〈すばるが体で考え…体でわかった〉という言葉がとても印象的。●小学校中高学年に。

■「奏のフォルテ」

黒川裕子／作

フレンチホルンのソリストを夢見る奏（かなで）が、自分に足りない〈何か〉を見つける物語です。

●14歳の奏は、一度DVDで観たレオニード・アブトのホルンの演奏に魅せられ、アブトが審査員を務めるジュリアード音楽院の入学オーディションを受けますが、アブトから〈君の音には愛がない…今の楽団で落とし物を見つけなさい〉と断られ、大きな挫折を味わいます。●物語を動かすキーワードは、奏がジュリアードのフリーコンサートで聴いた天才的なタカサキ・リュージュ（ルー）のオーボエ。●ハイライトは、ルーと奏、奏が属する吹奏楽部の黒沢、ショーコの4人が奏の最後の目的のために行うアブトを前にしてのゲリラ演奏。●音楽を続けることの意味やプロをめざす困難さ、気持ちを合わせる大切さなど、奏が周りの人たちとぶつかり合いながらそれを理解していくさまが魅力。ルーが人に理解されず抱えているあることも大事なポイント。黒沢、ショーコの個性に共感する中高生は多い…かと。



■「みつきの雪」

眞島めいり／作 牧野千穂／絵

ほどこよい距離を取りながら満希（みつき）と行人（ゆきと）が7年半をかけて互いにかかけあえない存在になっていく物語。●満希の村の小学校と中学校は校舎が合同でクラスは1学年1クラス。小学校



5年生のときに千葉から行人が山村留学生として村にやってきました。●山村留学は年限を限って都会から田舎に暮らして学校に通う制度。何年かで元の学校に戻るのが基本。満希と行人はその時からたった2人の同級生、そして、行人は制度の壁を超え、中学・高校と満希とともに村で暮らします。●物語は、高校卒業の1日前から初めての出会い、中学時代の2人にとって忘れないできごと、卒業前に決まった高校卒業後の満希と行人の進路、そして卒業式での他愛ないおしゃべりだけれど大事な会話、どれも2人の時間が育んだ関係だったことが伝わってきます。●行人が村にやってきた理由は最後に明かされますが、2人にとって思い出が詰まった図書室が大事な役割を果たします。●満希が行人をずっと見つめていたこと、行人が大事にしていたことをさりげない自然な言葉で語られる物語は、中高生に支持されるはず。

■「夏のカルテット」

眞島めいり／作

夏休み期間の図書委員活動で〈図書室〉の仲間になった4人が、考えてもいなかったバンドを組み、互いに刺激し合って自分のやりたかったことを見つけたり、前に進む



む力を得ていく物語。●物語の語り部は〈典：つかさ〉。夏休みの図書室に訪れる生徒はほとんどない状態。そんな中で、ちょっとしたきっかけで夏休みの自由研究を4人共同で曲に詩を付け演奏し、合唱を付けて完成させることがあったという間にまとまります。●作者のデビュー作「みつきの雪」と同じ〈図書室〉がマジックを起こす大事なキーワード。●4人で生み出すバンドのおもしろさに目覚めて始めることと仲間が受けている見えないいじめに立ち向かうサイドストーリーが絡み合い、4人それぞれが刺激し合う描写がていねいです。●希望を語る終わり方が中高生に響きます。。